

特35

373

大日本圖書會發行

一	一	一
六	〇	九
册	號	架

修身說話

中根淑閑  
阿部私藏撰

卷三

修身説話卷三目録

明治二十三年三月二十四日 内務省文書局

第一章

塵積ツて山となる

第二章

山くららべ

第三章

松平好房の孝行

第四章

自分が見て居る

第五章

ロラスのぼん

第六章

小はとり餌小斃る

第七章

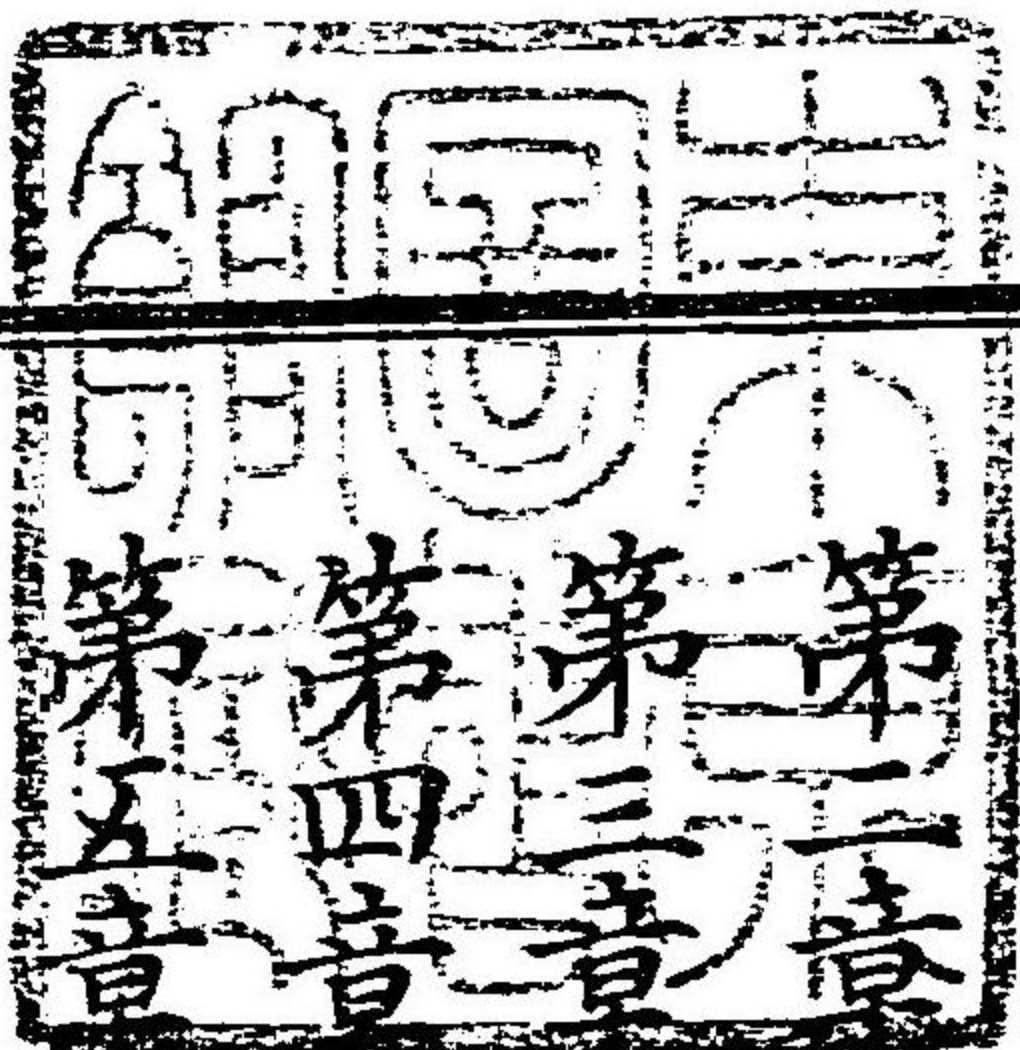
律義をのこ限る

第八章

蟻ときるをぐり

第九章

孫權學を勸む



第十章

念ふは念を入まよ

第十一章

ニユウトンの狗

第十二章

馴犬害小遭ふ

第十三章

寺澤廣高の養生

第十四章

ちくり娘

第十五章

口のきゝかこ

第十六章

まみまたんげ

第十七章

ラゼル父の訓を守る

第十八章

驢馬の志んぢり

第十九章

岡本半助のおとむやり

第二十章

口の門番

第二十一章

呂蒙の勉強

第二十二章

三諺の得失

第二十三章

龜の身の程知らば

第二十四章

農夫の遺訓

第二十五章

目と耳と頭

第二十六章

伊藤長衡の火箸

第二十七章

學ばざれば辱多し

第二十八章

井のうちの蛙

第二十九章

韓伯瑜の孝心

第三十章 あほうがらひ

第三十一章 三人かきは

第三十二章 論語讀みの論語知らひ

第三十三章 煙草どき

第三十四章 盲父のとほこび

第三十五章 狐のさかから

第三十六章 手と足

第三十七章 ジュリヤの林檎

第三十八章 小鼠の計略

第三十九章 阿柴の二十箭

第四十章 少年拳を喫す

第四十一章 乞食に賣らぬ饅頭

第四十二章 門前の小僧

第四十三章 信濃の子猿

第四十四章 手足の勤惰

第四十五章 薩摩の忠僕

第四十六章 茅容と郭泰

第四十七章 山番の指さき

第四十八章 熊の耳おき

第四十九章 グラスブローンの話

第五十章 飲食戒

第五十一章 清潔訓

第五十二章 松下禪尼のきりげ

第五十三章 猿のほども

第五十四章 野羊を失ふ牧者

第五十五章 蚊と牛

第五十六章 日と風

第五十七章 下女の後悔

第五十八章 盗人のふぎり飯

第五十九章 王守仁の訓戒

第六十章 ハレルニアンの餘香

計六十則

修身說話卷三目錄終

修身説話卷三

東京 阿部弘臧 撰

第一章 塵積ッて山とお家

話の要旨小善積りて大善とかり小悪積りて大悪とおるとの旨を説きて悪をん善小就カリんことを要す

世の中の 誇小塵積ッて山とお家といふことが

ありまへが、今其のわけを話しませり。

彼の塵はこりとつふ物の、至ッて細らおもものぞ  
あるが、若し一とあるに段々と積ッとならう、ま  
ッと大きお山が出来まへ。

何の富士れ山哉御覽ども、何んかに大きな形であるが、はまより小さな土らきや、小さな石のうまよりから成り立ッこので何をばす。

あれと同ドく皆さん、毎日少一づつでも善い事をあさると、遂に「たひ」善い事とあり、少一づつでも、悪い事をあさると、遂に「たひ」悪い事とありまは。

ぢやよよッて、彼の「塵積ッて山とある」といふ諺の如く、今から善い事はかき澤山ふあさるやうな心づけが、肝要で取りまは。

第二章 山くらべ

(説話の要旨) 大ききおる子が、小さきおる子を侮り、よろりからずとの旨を説示せよ、

ある時山がせの比べをうて、おれが高いの、われが低いのと、争ッて居る處へ、山の神が来て、先づ一番高い山ふ向ッて、山神「我ちのうらだふい、何が何と尋ねると、高山「たぶのをげ山で御座ふ、と答へま」た、

そよから、一番低い山ふ向ッて、山神「そちのから、ふい、何が何と尋ねると、低山「松や檜の木が、たんと取りまは」と答へま」た、

まきと、山の神が禿山に向つて、山神「山高きが故  
小貴きにあらば木あるを以て貴し」といふと、おち  
せられと、この話が有りませぬ  
なりの大まかさをかきで、威張せぬものぢや、

第三章 松平好房の孝行

(説話の要旨人の子たる者は、父母を敬べ  
て、能く事へ、父母を愛して、能く安んずべし  
し、どの旨を會得せしめんとを要す)

松平好房といふ人も、幼少頃より、父母に向つて、  
足を伸ぞしと事おく、父母より物を賜ふとたひ、  
推し戴いて、大切にしました。

父母から用をいひつけらるる時の、謹んで其の  
事成行ひはした。

父母が病氣小罹る時の能く側に居て、看病しま  
しと、

自分の、娘どん養生をこくして、父母よ心配をか  
けぬやうふあましと、

誰もかやり小心がけといふものぢや、

第四章 自分が見て居る

(説話の要旨我がまじわぎを、我が監督す  
るなら、おちかき、悪しきおとを得せま  
せん、この旨を説示)



うら處ふ一人の童子がいつてある日獨りてよ  
その座敷に居まゝだが、替こふの梨子が澤山ふ  
置ひていつまゝだ、

暫くすると人が来て「お前の人の居あひうちん  
あせ此の梨子被袂へ入さあかッ」といひま  
し、

すると童子が「ハイ、今あつ小人が居まゝ」から  
と答へまゝだ、

替こで、其の人が「お前をかまどと思ッ」がま  
誰う外ふ居よのか」といふと童子が「ハイ、ま

う」といふ人が「まゝ」のあまぎを見張ッて  
居まゝだ」と答へまゝだ、

自身で自身の行む小氣をつけよ、

第五章 ロラスのげん

(説話の要旨)無慾ある者は人の親愛を受  
けてもうらむが、幸ありとの旨を説示せ  
んことを要す、彼の舌きり雀  
の正直ぢが小於けりが如し、

亞米利加で飢饉のいつと時、いつ金持が毎朝は  
んを籠ふ入きて、近所の子供小一つばくふるは  
ひまゝだ、

はど免の内、子供等があとなく貰ッて歸ッ

たが段々それが常にあると禮さういはずに大  
 ききうおのを取り合ッて、おすひを合ッとうほ  
 みのをくささいおど、贅澤をいひ出した、  
 同ドく毎朝貫ひ小来りちろ、ロラスといつる  
 小娘がウッて、いつも、一番跡におッて、残ッとは  
 んを拾ッては、あまがさきうに持ち歸りほし  
 があう日、半かけをかりのを持ッて、うち歸ッ  
 て、何心なく割ッて見ると、中から銀のかさまり  
 が出まゝだ、  
 そこで、母親が驚いて、すぐおそれを還しにロラ

スをやると彼の金持がイヤ、おまは、おあこに殺  
 ツとのだらう、早く歸ッて、かきまんよあげおと  
 いッて、とうく、恵と與へらまゝと、  
 是まい、おほも小娘が、一番ウとで、おさひのを持  
 ッて行くあやを知ッて、彼の金持が銀のかさま  
 りを、わざや半かけの中へ入さ置いとので、ちり  
 まい  
 然るに、やけり、誰も大きひのを撰り取ッて、是れ  
 を残した故、小自然と無慾お此の小娘のもの  
 ありまゝと、

第六章 小まどり餌に斃る

(説話の要旨) 卷一第六章の小鼠の食ひす  
ばいと、同義おへ、過食の健康に害ある旨  
を、會得を要す  
んおとを要す

つる田舎の婆アさんが、一羽の鴟鷄に毎日麥を  
一合ばくあてがッところ、毎朝卵を一つばく産み  
まゝた。

そあて婆アさんが考つて、婆あれハ、以ッを三合  
ばくあてグツて、日小二つばく産ませよ方が早  
手廻しごと、おれうら、雞のいやがるのを構はず、  
無理よ口をおぢあけて、三合一度に食ませよら

其の晩腹が破れて死んでおまひまゝた。  
人もヤッぱり此の通り腹不相應につめおむと、  
きツとからごに大害をなすまゝ。

第七章 律義もの小限る

(説話の要旨) 心だて正直おして、詐り飾る  
事なけまご人よ向ひて、懼る所あり、飾る  
まの、勇氣の、律義より生むと  
の旨を、説示せんおとを要す。

加藤清正といふ人が、どうり武勇のまごられの家  
來を抱つたゆきのごと、ゆりく人の擇びりと  
をやッて見されど、別にまごごとしふ手段も出  
ず、打過ぎまゝたが、ある時人に向ッて、清正「拙者

年来勇士を尋ねるが、つまり律義お者に限りま  
す」と話してその事でありました。

律義といふ正直で手がふるふあつてあつた、ある  
ほど、勇氣といふもの、正しく直く、志ツうりと  
して簡の者であければ、ある答はありませぬ、

第八章 蟻ときをぐす

(説話の要旨)人の少壯のうちに、勤勞して、  
後の樂しさを願ふべし、わりくいて怠れ、  
ば、後小必ず窮まるものあり、との  
旨を、會得せしめんあとを要に、

冬がれの暖い日に、蟻が穴から、貯への餌を引き  
出して、乾して居る處へ、瘦せ衰へるときりぐに

が、むよろくと、ヤツて来て、きり「其の餌を少  
分けてくま」と頼みまゝ。

そこで、蟻がお前、食物があいのぶと、尋ね  
ると、きりぐ「さう、餘義あいつ、ふ顔をくま  
り」此の夏中の、毎日、毎晩、うごひはぐけと故あり  
く「冬の手伝てまぐ」とかあんど、と答つま  
す。

きりぐ、蟻が「ハ、ア、さうか、それ、さぞ、面白い  
事どツとらう、志かく、まぐ、汗みづくおあッ  
て集めて物を、お前のやうおなまけ者ふ、あげ

られぬから外を尋ねる方がよいと断りました  
話があります  
勤むる者は後逸し、怠る者は後に勞ひ、當然の  
理なり。

第九章 孫權學を勸む

(説話の要旨) 好き事の務めて人に勧め  
よとの旨を會得せしめんとを要す

支那れ、三國 蜀 呉の世に、呉の國の大將の呂蒙  
といふ人は、學問嫌ひでありました。其の主君  
の孫權といふ人が、孫權どうか勉強して見ると  
よいと勧めました。

ところが、呂蒙が「わたくしは、ゆくさの掛け引き  
がせむし、あら御座りませぬから、とても、其の義に  
及びませぬ」と辭退しはし。

すると孫權が「イヤ、それこそ、せげ、あつと、  
バ、拙者など、ハ、猶更の事ぢや、あれども、常に暇を  
偷んで、讀書して、大きに我が身に益ある事とを  
覺えさから、それで、それにも勧めろのぢや、わ  
る事ハ、以はぬうら、マアともかくも始めて見  
おといと深切にいまれました。

そこで、呂蒙が、忝く思つて、始めて本を手を取ッ

て學びまゝと、  
人の爲めふあつことを勧める程、好い事あり  
ませぬ。

第十章 念ふは念を入まよ

(説話の要旨)をべて、物事の鄭重に扱つか  
みべしとの旨を、會得せしめんを要す、  
世の中の諺ふ念に、念を入まよといふことが  
何をまねが、是れに總べての物事の氣をつけ  
るくにも、尚不氣をはけろといふ戒めでありま  
る。

ば、二度でも、三度でも、親御の前で、くり返して、間  
違はぬやうに、覚え込んで、それから先きつゝ、  
やうにまゐるが、宜しい。  
又人うら手紙おどを、届けてくれと頼まれとか  
ら、其の手紙を、落さぬやうに、始末して、尚不届  
けるまゝで、に、幾度も、氣をつけろが、宜しい。  
其の外、日々の事に就いて、成るとは、手抜けのお  
みやう、念ふの念を入れたら、とて、何りまぬ。

第十一章 ニユウトンの狗

(説話の要旨)卷二、第十七章の、怒むり、  
が、糊をかぬと、雀の舌を、截り、話と、反

對にて、心あき動物を、恨み咎めざ  
る實例を、説示せんことを要す。

英吉利の、アイザック、ニュウトンといふ人が、ある夜とをから歸つて来て、部屋の口から這入らうとすると、手飼の狗がかけ出して、志ッぱを掉つて、うきうきがりました。

さてニュウトンが、部屋へ這入つて見ると、あはれに、只今、狗がかけ出す時に、机のわきの燭臺を蹴倒し、そのと見えて、其の火が、机の書き物にうつつて、皆焼け失せて、あはれひまうと、

其の時ニュウトンの、少しも怒らば、狗の背中を

撫でさへつて、ニ、ア、汝、此の過ちを、知らぬい  
どらう、いとぞかり、申しほし。

誠にニュウトンの、情け深い人でありませう。さて、道理のとく分つと人で、何りほむを、いふ狗の、  
わらふ事とも思は、おめであまませう。

### 第十二章 馴犬害に遭ふ

(説話の要旨) 卷二、第二十四章の、「鳥の災難」と、同義小て、其の交りを慎まざれば、身の災害を受くることあるべし、との旨を、説示せんことを要す。

ばちといふ犬と、らばといふ犬と、あぐん懸意小  
しましとが、ばちの、至つておとあし、性分どが、

くまの極めて、がむしやらふとあつて、あつと、  
ある日、二匹が連れ立って、隣町まで出りけり、  
其の町内の犬どもが、かゆて、らまに、いぢぬぬ  
かれて居る故寄つて、たかつて、らまを取り捲き  
さんぐ疵を負せり、いげらふは、ちまて、一處に  
咬倒しまゝ、

此の「はち」の實は迷惑おとけで、いりまゝだ、と  
といふのも、おとなしくあつたものといふきあつと  
からぢや、是ごうら、交り、いゝ氣をつけること  
で、いり、

第十三章 寺澤廣高の養生

(説話の要旨) 晝の勉め、夜の憩ふべし、無  
用の談、夜ふかすべからず、との旨  
を、會得せしめ  
んことを要す、

寺澤廣高といふ人は、朝早く起き、終日、とほづ  
の事を勉め、日が暮れて、急ぎの用があつた時、夜  
ふけぬらちふ、やまみまゝ、

常に人お向つて、廣高「夜は、寐づづき、答のものを  
ぢや、無用の事に夜ふかすを、それ、氣がらゝび  
きて、明日の勤め、倦むものぢや」とかゝりまゝ  
と、



自分がかやういふ養生がよの故に、其の召使の人々にも成る丈け、早く休ませよとの事で行りま

宵ッけりの朝寐坊へ、おぐもろの事ぢや

### 第十四章 ちくろを娘

(説話の要旨)今日の事をさし置きて、明日の事を謀り、今年の事を棄て置きて、來年の事を慮らぬとあかれとの旨を會得せしめんことを要す

何片田舎の乳うり娘が、牛乳の壺を何とほの上へ載せてあるまあがら、娘此の乳残賣ッとお金で、鶏の卵を買ッて、それを解して、ひよッ子ふ

して、それを育て、卵を産ませ、それを賣ッて、帯を買ひ、その帯を賣ッて、衣物を買ひ、それあら、何して、かうして、とあんまり先きの先きまを考へ、夢中におッて、何とほをみる、と壺がこぼると落ッちちちて、乳が地びとく皆流れてしまッと、あんでも、外へ氣を移さよりの、目の前の事を志て志まふものど、

### 第十五章 口のきりか

(説話の要旨)すべて、言語のうへに就きて、作法を教へ、警戒を知らすべし、コトハ、あ

儂小二三の模範を示したるが、尚日常の心得とあるべき事を擧て説話すべし

人から物を問まれしは知らざる事、存じませぬ」と以ひ、知ッたる事、はッきりと答つよ。

人小話しを考かけし時、丁寧ふせよ、かりを免れぬ、ぞんざいあ言葉遣ひをすべからず。

人の話しあさし出口を急ぐらず、人の言葉を笑ふ事とあかき人の口真似まじからず。

早急とは、人に聴きとりあらし、きりとして、餘りのろくくと口きくも、宜しからず。

言葉のつぎ目に、エー又のアノーあど、いふこ

とを成るべく入れぬやうおせよ、

第十六章 きみまたんが

(説話の要旨)物の自慢をする者、とうく至らぬ者多し、との旨を、説示まじべし。

ある日、きみまが、わりの姿の優し、いとくむ、とんが、その姿の、あはらし、いとくむ、互に、きみまやう自慢をまじめあはし。

まゝと、牡丹が、美しい顔、いとくむ、イヤ、とら、きみまやうの好し悪し、いはぬものぢや、と、あど、人かとやうく、いッても、とんと、自分で、いッて、あどはあ、いよ、と申し、あ、た、話、が、ち、り、は、す。

やうくつまらぬ連中が、つまらぬ自慢をいひと  
がるものぢや、  
能く鷹の爪をかくすといふ誇り、奥ゆりく  
思をさくぞよ、

第十七章 ラゼル父の訓を守る

(説話の要旨) 父母長上の訓戒を守るとき  
の、身の幸福ふあつあつ多し、との旨を、會  
得せしめん  
おとを要に

亞米利加のチャアレス、ラゼルといふ少年が、學  
校に入らうとする時に、其の父親が、汝の學校に  
入つたらば、必ず、善い友、親めよと、かゝつて教訓

されまゝだ、

ラゼルの、常に、此の教訓を守つて居ると、ある日、  
途中で、ゼームス、グリーンといふ學校朋輩に行  
き逢ひまゝと、

此のグリーンは、怠りがちで、善い友とはいひら  
れず、人物故ラゼルの、左のそ、懇意にせず、居ま  
しと、が、此の時、頻ふ山へ同行せん、とを勧めま  
しと、

おきども、ラゼルは、固く断りまゝた故、グリーン  
が、獨りで行きまゝたが、木の枝に登つて、まづり

落ちて、大怪我をいたしました。

其の事が、新聞紙に載せられて、いさげらるゝの  
評判が、世間へ高くおツたので、ラゼルの其の時  
一處に行つたんだと喜んで、いよく父の教  
訓を守りました。

第十八章 驢馬の志くぢき

(説話の要旨) 人お氣に入られんとて、故さ  
らゝ愛相ぶる者、却りて、人お厭を  
あり、この旨を、會得せ  
しめんことを要す。

何う驢馬が、小犬の主人は可愛がられるのを見  
て、驢「あんでも、あんなおらんをいお、おやれついで

りからこついでをすれが、檀那の氣お入るお違  
ひおいと、主人の歸りを待ちうけて、いきあり前  
足をグイと擡げ、恐ろしい齒をむき出して、かぶ  
りつきまゝ、

さうと、主人が、肝校はぶして、かゝるおあツと天  
秤棒で、力まゝせふどや、はげさから、驢馬が大  
きふ後悔して、驢「あらあど、餘計お世辭をいふと、  
反つて人おいやがらまゝものば、

第十九章 岡本半助のおもむやり

(説話の要旨) 諺、我が身をツめて、人の  
痛さを知れといふ如く、我が身のうへに

引き比べて、他をおもひやるべしとの旨を會得せしめんことを要す。

岡本半助と云ふ人、幼い頃に、其の主人の井伊侯の供をして、家老の屋敷へ参りまはると門の内から飼犬が主人に吠えつきまゝと、

此の犬は、もと主人から此の家へ賜つたものぢやにとつて、主人がクワツと腹どつて、侯「誰うしろ、何の見苦しい長耳を、鉄ききれ、そこの主人を忘まをツと畜生よ」と罵らまゝと、

まゝと、半助が、玄關へ馳け上り、柱に懸けこゝる馬の毛きり鉄を取つて来て、主人の前へ進み出で、

半助「いざ、先づ御前の御耳うら、遊ばせられませ」と申しまゝと、

候「井伊侯が感心して、侯「いざ、畜生の耳ぢやとて、痛さうな事であらう」と心ばうれて、やえられまゝと、

### 第二十章 口元門番

(説話の要旨) 熱き湯を飲む、身體へ害はさば、必ずさまゝして後よ飲むべしとの旨を、會得せしめんことを要す。

何れも子、茶碗へにえこつた湯をついで、ガブリと飲むと、唇が「オ、熱い」といひ、それから齒ぐま

「オ、熱い」といひ、それから舌が「オ、熱い」といひ、それから喉が「オ、熱い」といひました。そこで、齒ぐまきが舌や喉と寄合をつけて、齒齧なんと、おんおん亂暴にやられて、實に閉口仕るでの御座らぬ、あの熱い奴が、さかッから胸でも腹でも、それ相應、難澁するに、相違あるまい、各ぐこの、如何で御座るか、といふと、舌喉一度お言葉を揃へて、舌喉「イヤ、もう、殆んど困りきりまゝ」と、是を、早速、唇を呼び寄せ、彼れが所存を承つと、うへ、何と、以後の用心を計らひませう。

と答へはしと、

そとより、一同連名で、唇を召びおやると、唇がすぐお來まゝ、だら、どりして、おんお熱いものを、入れと、ので御座ら、と尋ねると、唇が青くおツて、「イヤ、ハヤ、實に申しわけが、御座らぬが、あの時、拙者も、うツかりとして居て、是れ此の様に火ぶくまふありました、以後の必むあの様おんのが参ッたら、きツと、嚴しくメ切ツて、決してうち入まはせぬで御座らう」と申しはしと、それから、常に唇が口の門番を受け合ツて、用心

堅固不守ツとこの事でありまは、  
諸君の口には、ひまごかやう約束が立ちませ  
ぬ。

### 第二十一章 呂蒙の勉強

(説話の要旨) 人學がざれば暗く、學ぶが明  
くあり、明くありと暗きとの、學ぶと、學  
びざるとみえんととの旨を、會  
得せしめんとを要す。

吳の將呂蒙が主君の孫權に勧められて、始めて  
學小就きまゝだが、以上第九章を兼  
けて説き起せ成る程自身  
の心得とある事が多いので、呂蒙「ア、此の様  
な事なら、早くすれば、とらツとものを」と日夜

勉強しまゝたので、めツきり器量が立ちあがり  
まゝた。

此の吳の國に、魯肅といふ名高き人があつて  
かねぐ、呂蒙が文盲ぢやにとツて、「わんち男の  
話せぬ」と見限ツて、居まゝが、ある時ふと出合  
ツて色々論ト合ツて見ると、イヤ、おかくお人  
物ふおツと故魯肅が肝をつぶして、魯肅「お  
前のむかしの蒙坊で、おかくおツと」と申しま  
し。

まゝと、呂蒙が「三日何は祓ぐ氣をつけて見よ」と

いふことを御存ドおいふときめつけましたの  
でいよく魯肅が舌を捲きほしく。

是れといふのも畢竟の、主君孫權の深切から成  
つとわけでいひらるが、あうう當人の勉強もあ  
うお事であつたらうと思われまへ。

第二十二章 三諺の得失

(説話の要旨) 必壯の間は、早く學びて、異日  
の用を待つべしとの音を會得せしめ、  
おとを  
要すと

世の中の諺ふお後をぬきまの杖といふこと  
ありまへ。

又「盗人を見て繩」といふこと、あまほま。

又「喧嘩すぎん」の棒ちぎり木といふこと、あり  
まへ。

あんでも、すべて、藝ごとをう承て能くたあみ  
置いて、いざといふ時の間に、合ふやうにして置  
くが、第一の諺でありまへ。

ふぐん藝ごとをあまけて居て、其の入用お時お  
ちまて、あまげらへを始めらるが、第二の諺で  
ありまへ。

あまごんあまけて居る故に、其の入用お時の間お



合をば、それからあとで稽古して「サア、おんあり」と持ッておひと、アキんで見ても、間に合をぬのが、第三の諺であります。

人の第一の諺のやうに、かねての用意が、肝腎ぢや、此の諺と同ド意味の諺を、今一つあげようからぬ、まぬ先きの傘。

第二十三章 龜の身の程知らぬ

(説話の要旨) 人の、其の身の分限を忘るゝ時、其の身を破る基あり、との旨を會得せしめん、おとを要す。

ある時、龜が鷺小向ッて、龜「あ、おとが、高い處を、自

由自在に御飛びなさるの、實に羨しい事ぢや、といふと、鷺が「イヤ、お前が、水を自由自在に泳ぎなさるのと同ド、おけで、別小面白くもあつたのサ、といひました。

少ところ、龜が「是非一度空へ連れていッてくさ、と、せうみはく故、鷺が「そんなら、後悔おなさるな」といッて、龜の甲らをか、以、摺、高い處へ舞ひつがッて、おッ放さすと、龜の忽ち落ち下ッて、岩角小あッて、おあぐ、小、うわきて、志まッ、といふ話、が、ありはさ。

人の各本分を守らば、本分とは其の身づくりに  
つりあつたと分限の事ぢや。

### 第二十四章 農夫の遺訓

(説話の要旨) 家業の勉強、家の榮由の基  
おれが、人も各自の本業を勉むべしとの基  
旨を會得せしめ  
んことを要す。

ある農夫が、死おぎんに、子供を枕にとりてせて、  
農夫「さて、貴様とちよ、譲らばき物いららの麥畑  
のうちよあるから、よく氣をつけて、稼ぐがとい  
とつて、息が絶えはしと、  
そこで、子どもが泣くく、葬式を濟ませ、さて、

衆子「親父どの、何を麥畑の中に置ろしやつと  
らう、おらうと、金の茶釜でもつけておらうのり知  
らん、ドリヤ掘りかへして見やうではあつと、  
兄弟一同申し合せて、隅うら隅まで、掘返してが、  
びと一文も顯さあんど、

持とて、一同がツかりとて、せうとありに、麥  
を蒔きつけると、よく耕して、畑の底にはもあま  
さつて、善くみのと、三増倍のとり入まがあつと  
のぞ、一同始めて氣がついて、衆子「おらほど、親父  
どの、かこは、麥畑のうちにあつとて、

第二十五章 目と耳と頭

(説話の要旨) 視聽の作法及び頭容の心得ありとを懇切に説示せんことを要す。

物を視るに、正しく視るべし、横目して窺ふとありれ。

人の手紙や書き物をのぞくべからば、人の座敷をのぞく事となり也。

障子ふき油の間より、すみ見まじらば、

物を聴くに、落ちはいて聴く事、

人の話しを聞き聴きまじらば、

頭の容は直くせよ、仰ぎ過るも宜しからず、か

こ過るも宜しからば、左右に傾らるゝ、尤も見苦し。

第二十六章 伊藤長衡の火箸

(説話の要旨) 自分怪我をせますと人を怪我をさせますとす。人を怪我をせますとす。人を怪我をさせますとす。人を怪我をさせますとす。

伊藤長衡といふ人が、ある日、臺所の敷板を放

て、何り搜して居る處へ人が来て、何をあさふと

尋ねると、長衡「今此の板の間から、鐵火ばしを落

し、故それを取らうと思ひまは」と答へ、

まると、其の人が「おれがかりの物あらう、ッちや

ツて置きおされば、ひびとひふと、長衡が「イヤ、あそが惜しむから、でありませぬ、あ、の借屋の事ぢやうら、そ、の跡へ来と人が、若一板敷を踏ミ落して、此のかあ火箸で、土ふほむどでも、踏ミ抜くと、濟まぬうら、そ、を故出して置くのでありまいと答へはる。

第二十七章 學ばざれば辱多し

(説話の要旨)世に、不學不道、悲しきかな、  
學びて辱をか、ぬやうにせよとの旨を、  
會得せしめん  
ことを要す、

亞米利加小、某といふ文盲が、ある日、ニユ

ウヨルクへ行かうと思つて、其の二十里をうまり、  
 手前のステーションへ来と、あるに二つの瀛  
 車があつて、一つは、ニユウヨルク行き、一つは、ニ  
 ユウヘブン行きと、書きつけてあるのをどちら  
 がどうだか、讀めぬ故、そ、をに居し子小、尋ねると、  
 子供が、それを馬鹿ふして、そ、をと、ニユウヘブン  
 行きのうまを教へました。

そ、をで、まぐさは飛び乗つて、五六里以つて相乗  
 の人小聞けば、あれハ、ニユウヨルク行きで、あ  
 いと分つと、ある此の大の男が驚いて、字を知ら

ぬるど悔しむるあつと始めて自分で氣が  
はいて、三十二歳で學校に入りまゝ一が一心不  
亂ふ精出した故後ふ立派な物知りになりま  
し。

第三十八章 井のうちの蛙

(説話の要旨) さういふ物を辨へたりとて、  
なうく満足なきものふあらば、この  
旨を會得せしめ  
んとせよ

ある時蛙がふる井戸の底で空をながり見ながら  
蛙「あんと、天は小さいものぢや」といふと友どら  
が「いや、天をかりではあつ御互に住まッて居る

此の世界も至ッて狭いものでゲスといひま  
し、この話がわりまゝ

あるらど、井戸の底にばり居て考へたら、天も  
小さく見えよう、地面も狭く思われまゝでわり  
ませう

やうく物知り顔をして、獨りできまゝ居る者  
を井のうちの蛙といふは、此のまけであります

第二十九章 韓伯瑜の孝心

(説話の要旨) 親あつもの一日も永く親  
の健強あらんと願ふべしとの旨を  
會得せしめん  
んとせよ

支那の前漢の世に韓伯瑜といふ人がある時母親小腹どくまきて脊中をうたきほくことりあごとんと違つて頻りに泣いて居りまゝと尋ねるやとて母親が「おせ其の様に泣くのごと」と尋ねると韓伯瑜が涙をおすりあつて「韓伯瑜是れまゝにかくさほの御折檻ふつと事も度々て御座いまりたが、以はも脊中が痛いまゝた、ととろろが今日に限つて痛いませぬの、全く御手のか力がお弱りなきつこので、何らうと存ドまゝとて、それが悲しう御座いますと申しほく」と

誠に親を愛する者へ、折檻さうく間にもかやうに親のかうごの事を案ドまひ、もので何りまひ、

第三十章 あわうがらを

(説話の要旨) つまらぬ見えをして、友どちを見さぐると、其の友どち又見限らるるものあり、との旨を會得せしめんことを要す。

あわう鳥が孔雀の落し、羽根拾つて、自分の羽根の間へさし込み、鳥「これで、一番友どちを驚うしてやらう」と木の枝にとほつて、きよあつて居ると、仲間が下を何のさうして通るから、彌鼻を高くして、威張つて居ほく」と

やとぬつ、孔雀がヤッて来て、「不埒お奴め」といひ  
おのら、皆其の羽根をとりあげて見れば、ヤッぱ  
りまことの鳥とあり悔し。

そとぞ、困ッ顔をして、友どちの處へたどッて  
来ると、一同口を尖らし、衆鳥貴様のやうかあか  
つにお男の、おはまらひ申されぬと、平ぶとつり  
お断ッ話がありまは。

あんでも、つまらぬ見えをして、友どちを見さげ  
ると、かやう不見限られたものぢや、

第三十一章 三人かきは

(説話の要旨) 卷一第十六章の、教師生徒を  
戒むの、實例として、人の容貌體格の不具  
ある者を見て、それを侮り嘲ることあり  
ま、との旨を、會得せしめんことを要す、

福島正則とりふ人の家來に、尾關石見、長尾隼人、  
福島丹波といふ、三人の勇士があつて、石見の暗  
隼人の聳、丹波の跛でとりま。

ある時、徳川家康に召させ、此の三人が、其の館  
へ出頭すると、家康の近臣どもが、「よくもかこは  
の揃ッ」とものぶといつて互ふくすく笑ひま  
し。

まると、家康が「コリヤ、其の方ども、何を申して

居る彼を等ハいづまも、武勇拔羣の壯士あるぞ  
汝等もちとあまを見て、だうあみ候いと答めた  
ので、一同赤面いし、たとの事で行りまは

第三十二章

論語讀この論語知らば

(説話の要旨) 行儀作法を始として、身は行  
ふべき事が、行儀作法を見聞くにつけて、必ず躬  
ら行ふべし、さあくば見聞せぬ均し、  
との旨を、會得せしめんことを要す

世の中の諺に、論語讀この論語知らば、といふこ  
やが、何をほそ、其のこけは、論語といふ本の中ふ  
色々あ、爲めふある事、書いてあるが、それを讀  
んで、只讀んどばかりで、自身がその色を行はぬ

者は、つまり讀はぬも、同じ事ぢや、との事であり  
まは

持まて、諸君が、御兩親や、教師あど、うら、色々あ、好  
以事を聞い、あちど、いれり、あ、ま、る、を、の、ど、  
あまは、かり、する、を、の、ど、と、行儀作法や、其の外の  
事を、覚えて、も、只、覚えて、ばかり、で、それを、する、さ  
は、や、つ、て、見、初、め、や、つ、ぱ、り、論語讀この論語知ら  
ず、同然、であ、んの、役、も、立、ま、ぬ、ま、け、で、い、ら、る、  
ぢや、に、と、つ、て、なん、でも、よ、い、と、さ、と、つ、と、ら、必、す  
それを、その、通り、ふ、行、つ、て、見、ま、す



第三十三章 煙草がすき

(説話の要旨)初め小悪しき癖のつらぬやうう小せよ、癖づく時の改めふらきものあり、との旨を會得せしめんとを要す。

ある煙草がすきな男が、友どちの處で、以ろくな煙草を勧められまゝ、パクパクヤツて居らうちふ際限もあく出しかけられて、目ぐらついで胸がわるくなつとからいざお服と逃げ出さるとあとからどんく追ッつけ来て、まご此の通り名葉があらまゝと呼びとめまゝた。そつて男が苦しがツて、辻堂のうらり方へ匿れま

しく暫くたツて顔を出し、男ヤレ、恐ろしい目に、つと、ママ此の分での追ッかけて來おひつ、ドリヤ一ぶくやりませうと以ツて、まご懲りもせぬ腰うら煙管を出しかけまゝた。何んでも、惡る癖がつくと此の様小止まぬものぢやうら、初めより癖のはらぬやう小氣をつけるあつとぢや。

第三十四章 盲父のともあひ

(説話の要旨)不具なる親の、やさしきせがま小安心したる心もちを、説話して、子の愛情を感興せしめんとを要す。

ある盲目の老人が、夕かゝ窓に凭りうつして居ると、ある人が来て、「おまつい、お目が御不自由だから、花がさいても、花を見れば、雪が降つても、雪を見れば、月がさえても、月を見ず、さぞおのゝみのあひまゝとて、何りませうかと慰めほしく、まゝと、老人が、「イヤ、まゝおツツやる通りのかゝは、そので、ある甲斐もあひまゝけでありまは、ぢやが、あまがさゝの事に、わさうのせが、まゝあけられ、まゝく、あて、まゝあひので、何不自由なく、暮して、あひまゝの誠、まゝ子どものや、あひの

は、雪月花にもほさつとやうあ心持が、い、はま、と申し、ほしく、

子どもが、親およく、事つまが、親の心のと、あまび、あ、あ、あ、かやうなものでありませう、

第三十五章 狐のさかから

(説話の要旨、巻一第二十六章の、お、き、雀の如く、我が身の危難を逃れんとて、其の友どちを陥る、まゝの、我れ、先づ、害の遇ふ、あ、とありとも、人の、哀ま、ざ、る、つ、と、の、音、あ、と、を、得、せ、し、め、

ある日、狐と狸と連れどつて、遊山まゝと、向ふら、ら、熊が、や、つて、来、る、

少とろで、狸の氣のはかぬうち、狐が一足うけ  
ぬけて、熊の前に手をつゝの、狐「たゞ今、何とから  
狸が参りまゐ、何とをひきまゝはりの横道つ連れ  
込んで、檀那の御慰みふさぎ上げませう」といひ  
棄て、かけ戻り、膝らぬ顔で狸をどぼと一本  
まぢの横道つ曲らせまゝと

とまぬつ、熊が間近くおツとから、狐がそツと指  
きして、狐「あの突きつゝりて、お掴みあををせ」と  
いふと、熊がいきなり狐を掴はけて、熊「ヤ、此  
のつらぬ狸、どうせ袋の鼠ど、先づ手前からや

ツつけろ」といって、其の横腹をかツきばいて  
しほひました。

第三十六章 手と足

(説話の要旨)手足の態度を就きての作法  
を説くべし、但し、此の外一とび手を擧げ  
一とび足をふむは就きても尚  
は詳密小説示せんよとを要す

人の前にて、腕ぐまをすくう、すくうところ、手をす  
へうらび、又頬づゑをつくべうらず、

口のまはりを撫でさけり、或は、頭をかゝ等も、人  
の前にて、いゝ後しからず、

座する時に、膝をくばさぬやうおせよ、あぐら

をかいたり、足を投げ出さぬ、尤もわろし、  
椅子にかかると脚をかきねくり、足の先きみで、  
いさづらわすべりらば、

第三十七章 ジュリヤの林檎

(説話の要旨 卷二第九章の「アダムスの深  
切」と同義にて、我れは妨げをる者も、遂に  
我れの深切は服するものなり、と  
の旨を會得せしめんことを要す、

亞米利加の、ある町の、ジュリヤといふ小娘が、學  
校へ行く途中で、いつも自分より年をとけて居る  
女の子が、いぢめらまはしうら、いぢりか意趣が、  
「おしこいよの」と母親が尋ねると、母親が「お

んならあーだ、此の林檎を懐ろみ、其の子  
に逢つたら、やつてお見」と教つまゝ、

そとで、行く日、例の通り、出かけると、彼の女の  
子が、いきあり、雪を掴んで、ジュリヤの顔にあて  
まゝ、

「ジュリヤ、母親のいッ」と通り、やさし  
い聲で、「ハイ、おまをあげませう」といッて、用意の  
林檎を與つると、彼の女の子が、俄に氣の毒さう  
に、貫ひまゝだが、持れうら後、とんとまゝさを  
あつて、いさづらわすべりらば、

第三十八章 小鼠の計略

(説話の要旨物を言ふに、先づ自ら省みて以ふべし、自ら覺束おき事を人よきむるふとありきとの旨を、會得せしめんおとを要す、)

ある日、鼠が寄り合つて、猫は難義を避ける評議を始めると、一匹の小鼠が進み出で、小鼠「それを、雑作もあつ事でありはもつまり、お互小、猫の來るのが、早く分りさくまれば、よいのでありませう、を迷ふ、何より、猫は頸ツたまへ、大きお鈴を結びつけろが宜し、やつごこツをり來とすとすきと、頸でがらく、鳴り出さのら、をを相

圖に、逃るとし、をら、以つて、と利口ぶつて申しはし、

少ところ、で、一同なる程と、感心すると、一匹の老鼠と鼠が、おまへ、そんなら、あの猫の頸へ、鈴を結んで來おさるか、いとい、けれて、小鼠が、忽ち閉口し、と、以ふ話がありまへ、

まづ、自分に能をぬ事、何程巧み小しや、魚ツても、役小しぬものぢや、

第三十九章 阿柴の二十箭

(説話の要旨) 卷一第三十五章の、「とをぬと薪」と同義小し、其の實例を示し、とるお

り、宜しく兄弟戮力の必要  
あることを説き諭さべし

支那の宋の世に吐谷渾といふ處の阿柴といふ  
人が病氣に重くかつた時二十人の子どもも小箭  
を一本づつ獻ぜしめて先づ其の一本を弟の慕  
利延といふ人お折らせしめた、  
そとで慕利延が難なくおを折りまはさると今  
度の残つと十九本を一度お折まといをれしと  
ら慕利延がカ一ツぱいお折らうとしたのがおか  
しく折れる氣色もありませあんど  
すると阿柴が二十人の子どもお向つて、阿柴汝

等おれを記憶せよ、兄弟力を戮すれば、一家安く、  
兄弟心を合せざれば、一家危しゆめく忘るる  
おとあられといつて、目を眠りしめた、  
諸君の栗のつらさを御存じでありますらうとかく  
うちから割れ出して、人に取りられまはせよ、

第四十章 少年拳を喫を

(説話の要旨)是れは、随分、子どもにありあ  
うお悪戯ふて、此の老人の、それを懲ら  
めとあるあり、畜類とて、決りおと欺くべ  
らず、との音を會得せしめ、おとを要ひ

ある少年が、左の手、菓子を持つて、向ふよ寐て  
居る犬を呼びまはせると、すぐ飛び起きて、かけ來り

ま〜  
そこで、少年が、菓子をやつて、あつちへ、犬が擡げ  
と鼻ばらちを、ひきなり右の手に持つて居ると竹杖  
であぐらにつけさから、犬の、キヤン、キヤン、泣いて  
逃げまゝた、

まらと、見て居ると老人が、左の手に、蜜柑を持ッて、  
少年を招きまゝたうら、少年が、喜んで、馳け寄る  
と、蜜柑を、チヨイと引ッ込まゝて、右の拳で、あつ  
ちをコツリ、

第四十一章 乞食に賣らぬ饅頭

(説話の要旨) 人の自身の骨折ふよりして生  
活すべきものあれば、快樂の、身の勞作は  
應トて、受くるが、當然あり、との  
旨を、會得せしめんことを要す、

むら〜京都の四條といふ處に、近江上味といふ  
饅頭屋がありました。たが、ある日、其の見せ先き、  
一人の乞食が来て、其の饅頭を、十をかり賣ッて  
られ、と申しまゝと、亭主が、賣れぬ、と斷りまゝと、  
持とて、乞食が怒りまゝと、乞食、錢を出して買ふ  
の、賣れぬとは、どつりふまゝけぶ、といふと、亭主  
が、貴様の、毎日袖乞をして、人の錢を、只貰ひお  
から、ちんお上菓子を食はつと、了簡違あこと





されば、何んでも見やう見まねが肝腎おそいので、自然と、それが慣習となり、ほまらうら成る丈は、常ふ、と、以處ふ立ち入ッて、わらう以處ふ立ち入らぬやうにし、と、以處ふので、うらぬ。

### 第四十三章 信濃の子猿

(説話の要旨 卷二 第十六章の、丹波の子猿の如く、獸類の殊勝あるさまにつきて、幼兒の良心を感興せしめんことを要す)

信濃國伊奈郡の入野谷郷とりふ處の、ある獵師が、一匹の大猿を、打ちとッて、家に歸ッて、臺所にあつて、寐まゝ、たが、夜中に、何り火を吹く音が一

ほ、と、ので、獵師は、目をさま、物のかげうら窺ひまゝ、

すると、一匹の小猿が、いつの間あり、爐のはらに來て、頻りふ、己れの手を炙ッて、彼の大猿の死骸を温め、居まゝ、

そと、獵師が、ハ、ア、今日打ッたの、あれの親と見え、して、あの子猿が、親を慕ッて來て、何の様ふ手つてを、するの、と、ア、可愛さうお事をした、と、腹の中で、憐れを催し、それうら、子猿に餅を與へて、山つ放し、親猿を厚く葬ッて、遂に獵

をやめよとの事ではりまひ、  
以のにも子猿が親猿を以るはるさ面を見くら、  
獵師もむかしの兩親の事あどを思ひ出したで  
ありませう、

第四十四章 手足の勤惰

(説話の要旨) あまけると、つまり自身の損  
みあつと、いふあつとを説示せんことを要す、

ある時手足が以ひ合せて、當分まらざるで動く、あひ  
あつと極めまゝだ、  
あまひ、手足が、ふぶん働いて、得る所の食物を腹  
が獨りで、せしめるのを、以まく、一がツて、一番

腹をこぼらせてやらうと巧らんどあつとであり  
まひ、

そこで、パツタリ腹の中へ食物が來あくありま  
しとが、其れと同時に、手足がひどろくおツて、へ  
んお氣もちふありほしと、

持とぞ、手足が考へて、見るふ、是まひ、全くおれと  
ちが、稼があくなつとにきツて、ぶれも食物を買  
ひ出まよものがあひのど、それで腹めがいきつひ  
こまのと見え、イヤ、腹がかりあら構はぬが、な  
んどら、あまひ、ちもともぐふ、以まはまきさつに

おツて来よ、あれのやッぱり是れ迄のやうに働  
ひく腹を肥し、さかうが増しぢや」とそれうら再  
び動き出ると、又もこの通り、大丈夫おツと、と  
の事でありました。  
我が情りの、誰れの損ふもあらぬ、つまり自分  
が損をするのぢや、

第四十五章 薩摩の忠僕

(説話の要旨人の家小つうをう者らの  
げひおとあく主人を敬ひ尊ふべしとの  
旨を會得せしめ  
んことを要す、

むかし東海道のある驛で薩摩の僕が、其の主人

の爲め、清水を汲んで歸つて来る途中で、どこ  
の使者が、馳けとつて、其の水を一杯ふるまッ  
てらると、いふから、僕が柄杓で汲んで出ると、半  
分をかり飲まはくと、其の儘柄杓を桶へ投げ込  
み、禮を以ていふ、馳け行きはくと、

すると、此の僕が、追ッかけて、僕「ヤ、コリヤ、汝が  
飲まかけを、此の中へぶちあんで、なんとする、是  
れは、主人の茶の水であら」と以ッて、擔ひ棒をバ  
おツとツて、談ドつけられ、其の使者が、平蜘蛛の  
やうにあツて、ちやまり満くと、

をぞ、此の僕が勘弁して、桶の水をば、悉くうちあけて、十四五丁もある處へ、再び汲みよ行きまして、それを主人の遣ひ料ふしと、この事でありま。

第四十六章 茅容と郭泰

(説話の要旨) 一方に、茅容が行儀正しきさまと、善く母親の事ふるさまとを説き、一方は、郭泰が能く人を見ぬきて、能く為めよ謀りたることを、説示せんことを

要す、

支那の後漢の世に、茅容といふ人があり、ある日、其の朋輩と樹の下に雨やどりして居ま

したが、他の人々は、あぐらをかいより、投げ足をあぐり、不作法あるにも拘らば、茅容は、のりも、少しも形をなげ、はせあんど、

とてあつ、郭泰といふ人が、通りうつて、ハテサテ、行儀の善い人ぢやと感心して、それから、懇意にあり、ある日、茅容のうちへ、一晩泊りま、さて、翌朝にあらると、茅容が雞をこしらへ、はじめてから、郭泰が、おちかふ、をもちあすの、ごらふと思つて居ると、茅容が、そのを母親の膳よつけて、さう上げて、あまひ、自分の、野菜で、郭泰と一

處に、まゝまゝだから、郭泰が「かやりに親を愛する人、だんとあつたものぢや」と彌感心して、それうら、頻りに學問を勧めまゝ、たゆ忽後ふり、茅容といつば、人に知られずやうお人物にありまゝだ、

第四十七章 山番に指さき

(説話の要旨)口は深切を述べても、其のまじりぢの不實あるとき、人の感ぜぬものありとの旨を會得せしめん、おと相近き、卷二第四十一章の深切ごうと、相近き談おれども、猶一段薄情ある所爲をおきとるものと知るべし、

狐が獵師に逐ひつげられて来て、山番に男に向

ひ、狐檀那どとどく、火の間隠してくどきいと、いふと、山番が、あの番小屋へ、這入はと教へまゝだ、

そと、狐がそとく、まぐらに込んで、戸のまき間うらのぞいて居ると、獵師があとから馳けつけて、獵師、今こつてつらへ、狐が來たらうと尋ねまゝ、まぐらと、山番が、いふと、いひあがら、番小屋の方つ、あつた指さきを、獵師の、まふ氣が、はかど、さつさつ向ふ、馳け行きました、

獵師の顔が見えなくなると、狐が番小屋を飛び

出して往くから山番が「ヤイ畜生め禮の一つも  
以はねつ」といふと狐が寄り向いて、狐檀那の  
お指が御口の様に御深切あらどうして御禮を  
申さぬと往かきませう」といって話がありまひ

第四十八章 熊の耳あきり

(説話の要旨) 同ドク危険の場合又あきり  
互に告げ知らせあひて、ともく避  
くつふとをせよ、我れのみ避けて、其の朋  
を棄つるはとありれとの旨を會得せし  
めんと  
を要す、

ある朋友が二人連れで山奥に行きまゝだが、一  
人の男が熊を見つけて連れふ構をす、二さんに

樹に枝おかけあぐりまゝだ、

何とに残つと一人の男が「あれはとほらぬと、氣  
がつふとが、さう逃さふも、匿れるふも、間に合を  
秘ぶ、其の儘地上に倒れまゝだ、

やと後へ熊がやって来て、此の男の頭の廻りを  
嗅ぎ廻つと、息をころりして居る故よ、これに死  
人ぢや、はまらぬと思つと、向ふつ以って志満  
ひまゝと、

さうと、せん男が木からかりて来て、どうも  
熊が君も耳あきりやとやうだが面白い話で

もあつとかつと、りふと、祓て居る男が、目を何ん  
て、友どちぢひのあつもの、以来懇意ふ志あさ  
るあ、と教つくらまよと答へました、話があり  
まは、

第四十九章 グラスブローンの話

(説話の要旨) 我れ獨りにて樂しきより、  
ハ、衆とともふ樂しむま如く、ずとの旨を、  
會得せしめん  
あつとを要ま、

亞米利加、グラスブローンといふ小娘があつ  
て、ある日、父親に連れられて、ボストンの見せ物  
を見物して、小屋を出る時に、貧乏人の子どもが、

大勢招きの看板を見て、人の這入るれを羨ま  
さうにおがめて居ました。

まると、グラスブローンが、父親に向つて、パウと  
うき度、今の見せ物の、面白う御座います、と、どう  
う、何の子とちみも、見せてやり、と、いふので、御座  
います、と、申しました。

まると、父親が、そんあら、お、お三圓、何から、歸  
り、お、好きお画をかふとも、あの子とちみ、見物さ  
せてやるとも、勝手に、と申されま、と、  
まると、グラスブローンの、画を、と、み、て、みん

お小見物させよと云ふといふく、父親が其の望に  
任せて、子どもたちの人数どほ残らざる木戸錢を  
拂ッてやると、皆々おあこに禮を述べて、うれし  
さうに這入ッよとの事でありました。

此の小娘は、おんと感心お者で、ありませぬ。

第五十章 飲食戒

(説話の要旨) 専ら衛生上は就きて、飲食の  
慎むべき件々を、説示せんことを要す。

三度の食は、おろづく時を違へざるやうに、まづ  
一、  
うまさ物ふても、過食をべからべ。

硬き物、熱き物及び餘りにはめくき物を、飲食す  
べからべ。

あひどぐひをば好むべからず。

つゝき水を、飲むべからず、飲水は、成るべく、其  
のどしありを、人小尋ねて、後又飲むべし  
いまだつえざる菓物を、食ふべからず。

寐ぬる小先きどッて、飲食をすべからず。

第五十一章 清潔訓

(説話の要旨) 専ら衛生上に就きて、清潔  
法の身體は緊要あり、點を、説示す。

人のからどふ垢つく時、人に、いやづらさるば



かりていあく、第一、からだの爲めふろあし、  
毎朝必む顔を洗ひ、口を漱ぎ、よく髪の毛を梳  
かす、

爪の間に垢のたまらぬやうにせよ、

時々湯小入ッて、總身を清むづゝ、但し、餘り小熱  
き湯いと極しつゝらば、

衣物を穢まふとあられ、若し穢したるものをあ  
り、又、自然と垢づきくる時、成るづく早く着

かふ極し、

第五十二章

松下禪尼のまりたるを

(説話の要旨) 儉約の身を守るに、肝要の事  
あり、儉約といふは、妄に物を費さず、  
そのは、物を各むらあらしむるを、  
盡さんとてあり、との旨を、會得せしめん  
ちとを  
要き、

北條時頼といふ人の母親の松下禪尼といふ人  
がある日、障子の紙の切り張りをして居る處へ  
其の兄の安達義景といふ人が来て、義景人もあ  
らうに、その様か事を自身でまは、無益か事ぢ  
や、第一、みんな張りかへ、よくよきさうあまの  
申しはし、

すま、と禪尼が、あんで、物に、少しいんだ時小

繕って置けば、長持のさるものぢや、さういふやうに丹精をいゝものも、せづれ時頼の心得にかゝるやうにとての事でありましたと答つました。

其のあら、北條の、身代であつたおれど、其の母親は、猶不此の様に、はぐまやなのであります。

第五十三章 猿のはぐま

(説話の要旨は、吝嗇といふ事を戒めようあり、吝嗇といふ、只金銭を貯つて、義理人情を缺くおれど、儉約といふ、大かゝり相違あり、音を會得せしめんとすを要す)

ある吝嗇お老人が、一匹の子猿を買つて来て、いつのまに直に賣らうと思ひ、我が家よ飼つて置

きま

此の老人は、金を山あど積んで居ながら、困る者には、親類でもはきあつて人よ恵むの、世の爲めお施さぬといふ事は、話にきくのも、大嫌である。

ある日、老人が、留守におると、猿が、大事な金箱を持出して、金銀紙幣を掴み出し、窓から外へ投げ見て、おれど、だんく大勢拾ひ手がとつて来て、上におあつたり、下におあつたり、まるのを見て、面白がって、皆投げつけてしまひました。

とて帰つ、老人が歸つて来て、口もきけあくなる  
 ほどに立腹し、いきなり猿を捻ぢ伏せて、志め殺  
 さうとする處へ、鄰の男ぶと絶ふ來て、鄰人「さう  
 ぢいさん、お前が、志まッて置くつもり、猿の施し  
 惠んど方が、とッぽほど、世間の爲めよあうぜ、そ  
 て、此の上、猿を殺したら、お前の損のうはぬこと  
 いふものぢや」と戒めし、  
 とく儉約と吝嗇との別を知らねばならぬ、

第五十四章 野羊を失ふ牧者

(説話の要旨) ふるまふおとみの人は、頼り  
 きものおれが、とく遇すべきものおつた

一朝新知を得たりとて、俄に舊を忘る  
 と、きり、必ぞ悔むる事とあるべし、この旨  
 を、會得せしめ  
 んふとを要す、

ある野羊飼が、雪の降る日に、放して置つて野羊  
 を纏めて、小屋に追ひ込むと、どこから來たの  
 肥え太ッとした山野羊が、數十匹かぐんで居りま  
 した。是れは、全く、雪に迷つて來たのであ  
 る。そぐ、野羊飼が、自分の野羊と比べて見ると、遙  
 に向ふがと、以故に、いッそ此のまま、手馴らさう  
 と思つて、我が野羊にうける雪よけ藁を、皆山野  
 羊に衣せて歸りました。

さて翌日の天氣にあつたから小屋の様子を見  
廻ると我が野羊の皆ちぐえ死し山野羊の皆遁  
げ去つて所謂あぶも蜂も取らずとありは  
と。

是れハ新規の近ばきに氣がうつつて、ちとのお  
とみをつりすてと者の戒めで何とまん

第五十五章 蚊と牛

（説話の要旨）賢き人の愚ろある者と争を  
むつまり相手みせぬ方がよけれがあり  
つまらぬ者と争ふは我がつまらぬを顯  
えすに均しとの旨を説示せんことを要し  
蚊が牛の角にとはつて蚊「あはれ」んかに踏こ

つけるのふ手向ふ事の出来おはとは、さそく  
意氣地のお畜生ぶとつふと、牛が笑ひ出して、  
牛「あやく、おとに居とのうへちつともこした  
ハ知れあんどと申しました話が何りまん  
蚊の相手ふあるものには蚊あど小さくなけむが  
はり合はぬまけぢや、

第五十六章 日と風

（説話の要旨）疎暴ある者に人あまは服  
せず、温厚ある者ハ人おれは服すとの  
旨を會得せしめ  
んことを要す、

あゝ時風と日輪と、カらくらぐをしく、向ふを通る

旅人の合羽のぬぐせろくを始めまゝ、先づ風がヤツキとあつて、寒く烈しい大あくしを吹きかけると、旅人の一生懸命に領をとを押つ泣けて、吹けば吹くほど、とんと放りませおんど故、とても、その力には及ばぬと、風が手を引きほら、とちろで、日輪がポカポカと温うお光を與つると、旅人がよ心持さつに、合羽を脱いで、みつけほら、と、そぞ、なまほほど、日輪の力の驚く、そのものと風

が閉口し、といふ話が有りまは、

なんでも、服させるよ、服して来るが、おあこの徳といふものぢや、即ち諸君が人に向つて丁寧よまれば、人が自然と、諸君を親愛するやうにかゝるものぞ、有りほま、

第五十七章 下女の後悔

(説話の要旨)横著もの小の、樂が出來ぬ、といふ大とを、説示せんおとを要す、

ある家の下女が、毎朝早く起きるのがつらきに、ある夜柱時計を、ぶぶとくはせて、おらくと、主人が、今朝はまぶ早いと思つて居るうち、いつら

東が白らんで志まッと、

そぞ、下女めが其の次の晩も、又其の次の晩も、時計の短針をどどと置いて、毎朝寐坊の出来るのを喜んで居ると、主人が、時計を、時計師のうちへ直してやッと、

そぞ、下女めが彌喜んでおれうら、猶寐寐こけても、大丈夫どと思ッて居ると、其の翌朝、眞ッ暗あうちから、主人が度々呼び起して、主人「コリヤ、竹や、おまうら、毎朝起してやるが、時計の何ッと時分と違ッて、油断をしていなさぬぞよ」と

ひひま、

おれから、毎朝暗いうちから「竹や、竹や、が苦しくおッて、下女の始めて後悔「ア、うらはおい、時計が欲しい、

### 第五十八章 盗人のふぎり飯

(説話の要旨) 心どての上からぬもの、心どてのふりつくろけんとして、心どての底を見抜くものあり、この旨を、會得せしめんおとを要す、

盗人がある家ののでいて居ると、飼犬が目をおさあして、ワンワン、ワンと吠えつゝ、そこから盗人が、是ハだまれば、如く、と袂の中から握りめしを

出して投げはけまゝと

まゝと、飼犬が猶吠えつゝワンワン、ま

や法によくと曲もの小違ひおひ

まゝで我が身ふらふ暗い事がつまびまどく

なふらど、彌先きに氣をつけられるものぢや

### 第五十九章 王守仁の訓戒

(説話の要旨) 善き事をすれば、人の喜ぶもの  
おれが、必むせよ、惡しき事をすれば、人の  
厭ふものおれが、必むすべうらむ、  
との旨を會得せしめんことを要す、

支那の明の世の王守仁といふ人が諸生に示し  
と教訓の文ふ若し善い事をしと、父母に怒ら

れ兄弟に怒まれ親類其他の人々ふ悪まれたる

まけあらば善い事をせぬのもよけれども善い事

をまれば父母ふ愛せられ兄弟に悦ぶれ親類

其他の人々に敬ひ信ぜらるるのをあふと

てせぬのぢや若し惡い事をして、父母ふ愛せ

られ兄弟に悦ぶれ親類其他の人々に敬

ひ信ぜられまけあらば、惡い事をすするものもよ

けれども、惡い事をまれば、父母に怒られ兄弟

に怒まれ親類其他の人々に賤しと惡ま

れるのをあはんとて、惡い事をまするのぢやとむら

一の人の言を導く事とが巧く、その道理をよ  
く考へておろ成るは、善い事なまらるものぞ、悪  
い事なせぬものぞといふ事とが、わづらうてあら  
う、と書きつけて、示されまゝ、是を如何に如何  
尤もお話して、何をほま、

は、まゝ人のと、後こぶ善い事をして、人のいやぐ  
る悪い事をすま、おとの教訓であり、ほま、

第六十章 ハレルニアンの餘香

(説話の要旨) 人の必む一生の中、好まき事  
を多くして、あとに芳き名をよびむ、むづ  
めの吉を會得せし  
めんことを要す、

ある洋酒屋の見世さまに、ハレルニアンといふ  
名高の銘酒の明き瓶が、轉がって居ると、一人の  
婆アさんが、通りかゝって、其の瓶のにおひを嗅  
ぎはけ、立ち止まッて、瓶の口を鼻先さまおろし  
て、婆「ウ、ウ、ウ、い、香ひど、ウ、ウ、い」と嗅ぎづめ  
に、婆「エ、エ、エ、い、つらきぬ、い、香ひど、あんで  
も、中身のつツと時、どんあにかッ、事どら  
う、知さぬ、此のぬけがらでさ、あんなに、  
香ひが、い、ものを、と申しまゝ、話がありま、  
世の誇ふ人の一代、名、末代、い、ひまゝ、て、生ま



て居るうち、好い事をされ、其の好い名前が、  
 後の世までも傳へて、人小思ひ慕われます、  
 生きて居るうち、悪い事をされ、其の悪い名  
 が、後の世までも傳へて、人小厭ひ嫌われます、  
 のであり、  
 ぢや、おとって、願ふく、此の「ハレルニアン」とい  
 ふ銘酒れ、如く、何となく、まぐも、人に思ひ慕はれ  
 るやうにあり、  
 ぢや、

修身說話卷三終

明治二十年二月廿二日版權免許  
 同年三月 出版

定價 半八錢

撰者

東京府士族  
 阿部弘

藏

出版人

東京府士族  
 原亮三郎

原亮三郎

大賣捌所

大阪心齋橋筋北久宝寺町四丁目  
 金港堂原亮三郎支店

賣捌所

岐阜  
仙臺

金港堂支店

各府縣下代理大賣捌所

